

翻訳と注解 F・ヴェットーリのマキアヴェッリ宛書簡 (1514年12月3日～1515年1月16日)

著者	石黒 盛久
著者別表示	ISHIGURO Morihisa
雑誌名	言語文化論叢
巻	25
ページ	149-165
発行年	2021-03-30
URL	http://doi.org/10.24517/00061568



翻訳と注解

F・ヴェットーリのマキアヴェッリ宛書簡

(1514年12月3日～1515年1月16日)

石黒盛久

【はじめに】

以下に訳出・注解・紹介するのは16世紀初頭のイタリア・フィレンツェで活躍した貴族・外交官・政治家フランチェスコ・ヴェットーリが、その友人ニコロ・マキアヴェッリ宛に書き送った4通の書簡（1514年12月3日付／12月15日付／12月30日付／1515年1月16日付）である。マキアヴェッリ／ヴェットーリの往復書簡のマキアヴェッリ思想史研究上における意義については、筆者が公表したこれに先立つ時期のヴェットーリ書簡の訳出にあたり、その解題において言及しているので今回はこれを省略したい。関心ある向きはこれらを掲載した『世界史研究論叢』第9号及び『金沢大学人間社会学域学校教育系紀要』第12号を参照されたい。

話題を専ら今回訳出した4通の書簡の、マキアヴェッリ／ヴェットーリ往復書簡全体の中での位置づけに絞れば、まずこれらヴェットーリの書簡4通とそれに対するマキアヴェッリの返信5通の都合9通は、マキアヴェッリが自身の出獄をヴェットーリに報告した1513年3月13日付書簡に始まる、41通の書簡群の最後尾を構成している。1514年12月3日のヴェットーリ書簡と、それに先行するマキアヴェッリの8月3日付書簡の間に、残存書簡に関する限りではちょうど4か月もの長い空白期間があることを考えるなら、これら9通が両者間の一連の往復書簡において、一つの大きなブロックをなしていることは疑いない。9通の口火を切る12月3日書簡の冒頭でヴェットーリがホラティウスの

『書簡集』を引用しつつ、「我が友よ。君が充分敬意を払われた士でありかつまた、賜暇を授けられた人物であるにもかかわらず、そのあなたを昔日の業へ引き戻そうと僕が苦心惨憺することに驚かないでくれ」と書き記していることから、この長い空白が彼ら相互において十分意識される事柄であったことが理解できよう。

それではヴェットーリはマキアヴェッリをして、いかなる「昔日の業へ引き戻そう」とするのだろうか。続く内容から直ちに理解されるように、それは即ちイタリアという将棋盤の上で権謀術数の駆け引きを繰り広げる、諸国の支配者たちの隠された意図を揣摩臆測する外交官の業に他ならない。ヴェットーリがマキアヴェッリをこうした業に引き戻すことを余儀なくされたのは、先立つ8月3日書簡末尾でマキアヴェッリが、自身の経験している恋の甘美さを語りつつ、「私は、重要で深刻な事柄について考えるのをやめてしまいました」、「昔のことを読んでも、昨今のことを論じても、もう面白くないのです」と宣言しているからである。あまつさえ彼はヴェットーリに対して、「私への手紙には、女性のことについてなら何でも書いて下さい。でもそれ以外のことは、どうぞ他の人と議論してください」とすら言い切っている。両者の間の4か月の書簡のやり取りの空白が、この8月3日のマキアヴェッリによる、いわば議論の打ち切り宣言に由来するものだと見るのは、うがちすぎた考えであろうか。

1513年3月13日のマキアヴェッリによる出獄報告の後、両者の書簡の往復は失職したマキアヴェッリによる、有力者ヴェットーリへの就職斡旋依頼から始まっている。こうしたやり取りは、1513年4月21日書簡においてヴェットーリがマキアヴェッリに対し、当時のイタリアの政治外交情勢に関し分析判断を依頼したことを契機に加熱した。だが本誌23号掲載の拙稿（「ルネサンス期における友人関係と〈自己〉の演出—マキアヴェッリのヴェットーリ宛書簡(1513-1515)」）において考察したように、こうした疑似外交官的業務の委託自体が、執拗なるマキアヴェッリの就職斡旋依頼に対し、これに十分応える意志を持たないヴェットーリが苦し紛れに案出した、前者の気持ちをなだめる手管だったようにも思われる。こうした依頼のもたらす将来に復職への可能性を見出し、せつせと意見具申する中年も暮れ方に差し掛かったマキアヴェッリの姿に、若き日

まさにヴェットーリと同じローマ駐在大使だったリッカルド・ベッキの依頼に応じ、サヴォナローラの政治上の手練手管について詳細な分析を書き送った、若き日の彼の姿を重ねて見ることもできるだろう。マキアヴェッリのかかる熱狂は、『君主論』脱稿を告げるかの有名な、1513年12月10日の書簡の送付まで続いていく。だがちょうどこの書簡を送付した前後から、政治外交上の意見具申へのマキアヴェッリの意欲は急速に衰えていった。先の拙稿においても示したように、その背景にはたとえ悪意によるものではないにせよ、自身がヴェットーリから適当にあしらわれているに過ぎないことを、マキアヴェッリが自覚するようになったからであろう。そう考えれば、1514年12月3日、往復書簡の再開を求めるヴェットーリの手紙に、「とはいえこうした依頼をするについて、君に対する善意がない訳じゃあないことは、きっとわかってくれることと思う」という、弁解めいた台詞が登場することも得心が行く。

ともあれ拙稿にも論じたように、このように政治の場における彼我の地位の格差を実感したマキアヴェッリにとり、自身の矜持を維持しヴェットーリと対等の友人として交友できる場こそが、恋愛談義の格好の連れ合いという幫間的立ち位置だったのではないか。「君に対する善意がない訳じゃあないことは、きっとわかってくれることと思う」というヴェットーリの、腫れ物に触るような慇懃な言葉遣いにも逆に、こうしたマキアヴェッリのささくれ立った気持ちに対する、よき友ヴェットーリの細やかな心遣いを見て取ることができるだろう。それどころではない、おそらくこの空白の4か月の間にこのヴェットーリは、『君主論』の草稿や友からの意見具申の書簡を元手に、マキアヴェッリの将来の復権に向けて、決定的な道筋を整えてくれていたのだ。そのことを示すものこそ、1514年12月3日付書簡に他ならない。

この手紙の冒頭でヴェットーリは、教皇の心境を忖度するという態を示すことにより、今回の状況分析依頼がメディチ家中枢から発せられたものであることを依然ぼやかしている。だがこの書簡の後半に至るや、「君の提言書を教皇聖下にご覧いただくかのような心持で僕に対し論じてほしいと思う」、更には「この手紙を君からのものとして聖下にご披露するつもりだと約束しよう」と、今回の依頼の裏にある真意を婉曲に漏らし始めている。「それというのも、僕は君

がそれに値する才華の持ち主であることを知っている。君が外交の第一線から退いてまだ2年しかたつてはいない。君が外交の技芸を忘れてしまったなんて、僕にはとても信じられるものじゃない」という言葉から窺える通り、マキアヴェッリの就職が、遠回りでも自身も讃嘆措く能わざる、マキアヴェッリの外交官としての能力をメディチ家の要人に認めさせることによってしか、成就し得ないとヴェットーリが確信していたからであろう。

この12月3日付書簡に対する返信(1514年12月10日付書簡)におけるマキアヴェッリの分析は、ヴェットーリを満足させるものであったことは確かだ。これに対する12月15日付書簡でヴェットーリは遂に、「君にこうした質問をしてみるよう僕に依頼したメディチ殿下に、僕はまだ君のこの手紙を見せてはいない」(傍点引用者)と、彼が当時のメディチ政権のNo.2 ジュリオ・デ・メディチ枢機卿に、マキアヴェッリ復職の渡りをつけたことを遂に明らかにしている。加えて「この手紙は彼を満足させること請け合いだ。だって僕自身がそれに満足したんだから。殿下に見せた際に彼が何と言ってくれたか、君に伝えることとしよう」と、温かい論評まで付け加えているのだ。実際マキアヴェッリの12月10日付書簡(これはマキアヴェッリ自身の意気込みを示すように、極めて長大な「論考」となっている)と12月20日付書簡は、続く1514年12月30日付ヴェットーリ書簡の「君から受け取った二通の手紙は、既に教皇様とビッビエンナ及びメディチの両枢機卿にお目にかけて」という一句から窺われる如く、メディチ家中枢の人々の閲覧に供され、彼らの「全てが君の才華に驚嘆され、君の判断力を称賛されて」いるほどであった。「単に言葉以外の何かの約束を取り付けてあげることができないでいる。とはいえこうした貴顕の方々によく思われたということは、君にとり決して悪いことじゃあないだろう」

(ヴェットーリ発マキアヴェッリ宛1514年12月30日書簡)ーマキアヴェッリへの讃辞に続くこの言葉にも、マキアヴェッリのからの苦情に対する、やれるだけのことはやっているんだというヴェットーリのぼやきが聞こえる思いがする。

とはいえ「言葉以外の何かの約束を取り付けてあげることができないでいる」というヴェットーリの真率な言葉通り、マキアヴェッリの復権はなおも容易なことではなかった。事実ジュリオ・デ・メディチ枢機卿の指示を背景とした、

フィレンツェ政府による『フィレンツェ史』執筆依頼(1520年)による、マキアヴェッリの公人としての復権までには、更に5年の月日が必要であった。その理由もまた、今回訳出した4通の書簡からほの見える。注目したいのは、これらの書簡の随所に現れる「我々の友人」とか「かの御仁」とかいった、婉曲表現で示唆される人物の影である。古来多くの注釈者によりこの人物は、メディチ家の当主にして教皇たるジョバンニ・デ・メディチ(レオ10世)の秘書ピエロ・アルティンゲッリのことだとされる。この4通の書簡においてはマキアヴェッリがヴェットーリに仲介を依頼した、彼の友人ドナート・デル・コロソの公職就任の件の妨害者として際立っているが、アルティンゲッリは単にコロソの公職就任の妨害者であったのみならず、マキアヴェッリの復権自体の妨害者でもあった(フィレンツェ支配を任された教皇の弟ジュリアーノ・デ・メディチに対し、マキアヴェッリを近づけないよう警告を発したのもアルティンゲッリである)。それは単にメディチ家の一従者としての彼の気儘な判断によるものではなく、彼の直接の主人たる教皇の意向を忖度した上での行動であったに違いない。つまりヴェットーリの懇懇により彼の才能を評価し、これを活用しようと考え始めたジュリオ・デ・メディチ枢機卿とその周辺と、彼を警戒する教皇レオ10世周辺では、マキアヴェッリに対して、感情に微妙な温度差があったのである。マキアヴェッリが本格的に復権を開始するのが、レオ10世薨去に伴いメディチ家の当主の座が、ジュリオ・デ・メディチ枢機卿に移動してからのことであることも、このことを裏書きしている。

ともあれジュリオ枢機卿にマキアヴェッリを推挙し、その存在を認識・評価させたのは偏にヴェットーリの周旋の賜物に他ならない。その意味で彼は、迂遠ながらも最も確実な方法でマキアヴェッリの就職依頼に応えたのである。今回訳出した4通の手紙は、ジュリオ・デ・メディチ枢機卿の愛顧の獲得という、マキアヴェッリの今後の人生の転換点を示す出来事の証言として、極めて重要な資料となっているのである。ヴェットーリ自身のマキアヴェッリに対する呼びかけの決まり文句を用いれば、ヴェットーリこそは確かにマキアヴェッリにとっての、「我がよき友」(Compare mio caro)であった。

なお翻訳にあたっては N. Machiavelli (a cura di G. Inglese), *Lettere a Francesco*

Vettori e a Francesco Guicciardini, Rizzoli, Milano, 1989 を底本とし、N. Machiavelli (a cura di F. Gaeta), *Lettere*, Feltrinelli, Milano, 1981 (2 ed.), N. Machiavelli (a cura di C. Vivanti), *Opere II*, Einaudi Torino, 1999 をも参看した。各書簡の冒頭に付された番号は、イングレーゼ版書簡集における通し番号である。なお、本稿の作成に当たっては科学研究費補助金・基盤 (C)「知の技法としての人文主義的書簡と近代教養市民の自己形成」(研究代表者・森弘一) から多大な助力を賜った。特記して謝意に代えたい。

翻訳と注解

【33】

フィレンツェなるベルナルド・マキアヴェッリ殿の息、威名赫々たる士 ニッコロ・マキアヴェッリへ

1514年12月3日

我が友よ。君が充分敬意を払われた士でありかつまた、賜暇を授けられた人物であるにもかかわらず、そのあなたを昔日の業へ引き戻そうと僕が苦心惨憺することに驚かないでくれ。なぜなら僕が君の役に立つかどうか証明しようという気がなければ、僕だってこんなことはしないからだ²。先日来僕からたくさん言葉を受け取りながら、実効があったことなどちっともないじゃないかと君は言うかもしれない。だがそうした君のぼやきに言い訳するのは造作もないことさ。僕は僕自身に対してすら役に立たない存在なんだから、たとえ君の役に立ってあげられなくても、驚きたもうなということだよ。とはいえこうした依頼をするについて、君に対する善意がない訳じゃあないことは、きっとわかつ

¹ イタリック体部分はラテン語。ホラティウス『書簡集』I, I, 2-3 からの引用。

² ヴェットーリの別の書簡にも言及されるように、教皇レオ10世はマキアヴェッリの分析と提言に目を通してている。

³ 従来からのマキアヴェッリによる、ヴェットーリへの就職斡旋依頼のことを指すものであろう。

てくれることと思う。

僕がここで君に質問することに君が答えてくれるようにと願っている⁴。この点に付き僕は君に、質問に関する僕の考える前提条件をまずは次のように示しておこう。即ち教皇聖下が、教会がこれまで享受してきた聖俗の権威と権限を維持し、更には可能な限り速やかにそれを拡大することを望んでおられるに違いないということ。そしてまた加えて次のような前提条件をも提示したい。即ち、フランス王がミラノを再獲得すべくあらゆる努力を払い戦力の再建に努めている一方、一年前と同様にヴェネツィア人たちが彼と連携しようとしていること。また次のようなことをも推測をも前提条件として提示しておきたい。即ち皇帝、カトリック王さらにはスイス人たちが、このミラノをフランスから防衛すべく同盟を結成していること。こうした前提条件を踏まえ君に尋ねたいのは、君の見解によれば教皇聖下は如何に振舞うべきかということに他ならない。もし聖下がフランス王と同盟を結んだ場合、彼が勝利を収めた暁に、聖下が彼から期待し得ることは何か。またその一方でもし彼が敗北を喫した場合、聖下が懸念しなければならないことは何か。またフランス王と結んだ場合、彼の敵対者たちについて聖下が懸念しなければならない点とは如何なるものだろうか。また反対に聖下がこれらフランス王の反対者たちと結んだ場合、彼が勝利を収めた場合に聖下が恐れなければならないことはどんなことで、その敵対者たちが勝利を手にした場合、聖下が彼らからもたらされる期待と懸念はいったい如何なるものであろうか。さらにもし聖下が両者の間で中立を守った場合、フランス王が勝利を収めた際、またその敵対者たちが勝利を収めた際、このそれぞれについて聖下はいったい何を恐れるべきであらうか。また君の見解によれば、皇帝やスペイン王は教皇聖下と同盟しているにもかかわらず、聖下を見捨ててフランス王と協定を結ぶ方が、彼らにとって利益となるのではないかどうか。また最後に聞かせてくれ、君の意見によれば、もしヴェネツィア人たちがフランス方から寝返り皇帝やカトリック王と結んだ場合、フランス王のイタリアへ

⁴ ここでヴェットーリは、1514年後半のイタリアにおける、複雑な政治状況を取りあげている。こうした状況の詳細については、グイッチャルディーニ『イタリア史』XII, 1-9を参照せよ。

の侵攻を防ぐために、聖下もまた彼らと協調すべきかどうか。

君への質問が大変難しいものだという事は僕にも良くわかっている。また事態の説明を急ぎすぎて、それを訳のわからないものにしてしまったこともよくわかっているつもりだ。だが君は持ち前の賢明さや天賦の才そして経験に照らして、僕が言おうとしながらそれを書いて十分に説明できなかった事柄がどんなことであるか、よくわかってくれているに違いない。僕は君がこの件につき、あたかも君の提言書を教皇聖下にご覧いただくかのような心持で僕に対し論じてほしいと思う。このことを種にして僕が、ちゃっかり功を横取りしようとしているなどとは思わないでくれ。もしそれが適切だと君が判断するなら、この手紙を君からのものとして聖下にご披露するつもりだと約束しよう。僕は他の人から名声もまた他のいかなる物もかすめ取ったりしたくはない。自分自身にでもあるかのように愛している君に対してならなおさらだ。僕が上で既に述べたことについて君はさらに、フランスとスペインの休戦が来る4月初めに失効することや、これが決して確かな話であるとは言えないものの、フランスのイタリアにおける優勢が彼にとって決して面白いものではないと考えられるにもかかわらず、イングランド王がフランス王家と親族関係を結んだことを、頭に置いておかなければならない⁵。これらの全てを踏まえて状況分析をしてほしい。僕は君がそれに値する才華の持ち主であることを知っている。君が外交の第一線から退いてまだ2年しかたつてはいない。君が外交の技芸を忘れてしまったなんて、僕にはとても信じられるものじゃない。

ドナートに僕からのあいさつを伝えてくれ。そしてヴェスプッチ騎士がしばしば僕に、彼の依頼の件について太鼓判をおしてくれていると付け加えて欲しい。この件についてはもう一度手を尽くしてみるよ。だがうまくいかなかった場合には、彼に対してどうかご勘弁願いたいとも伝えてほしい。キリストが君を守ってくださるように。できるだけ早く返事をくれたまえ。

フランシスクス・ヴィクトリウス　ローマ駐箚大使

⁵ 1514年8月7日、イングランド王ヘンリー8世とフランス王ルイ12世の間に、同盟が締結され、10月にヘンリーの妹メリー・テューダーが後者の妃として嫁いだことを指す。

【36】

威名赫々たる士 ニッコロ・マキアヴェッリへ

1514年12月15日

我が友よ。長らくの音信不通の後、この二日の間に君からの三通の手紙を受け取ったよ。一通は、君が僕に一揃いのタイツを作るための青い布地を送るよう頼んだものだ。それを明日に君宛てに送ることにするよ⁶。君が誰のためにそれを欲しがっているのかは尋ねないでおこう。君が満足してくれさえすればそれでいいんだ。ラテン語で書かれたもう一通は⁷、君の友人のタファーノが私の処に届けてくれるはずだったものだ。ところがどういう訳か彼は私のもとには現れなかった。タファーノはこの手紙をある商店員に預け、この人物がこれを私の従者に手渡すということになった次第だ。タファーノに会えなかったことは残念だ。というのも君への友情の証として彼に便宜を図ってやりたかったからだし、君が彼に口頭で説明することを依頼した君の生活のありさまを、彼の口から直接に聞くことができたからでもある。これから人を使ってタファーノを探させることにしよう。そしてもし彼が見つかったなら、僕の出来ることなどたかが知れたことにすぎないけれど、彼が君の手紙を僕のもとに届けてくれたことが、彼にとっても利益となることだったことを教えてやろうと思っている。僕が君に対して投げかけた問いに対する答えとなる君からのもう一通の手紙を、僕は昨日落掌した。君にこうした質問を試みるよう僕に依頼したメディチ猊下に、僕はまだ君のこの手紙を見せてはいない⁸。だがこの手紙は彼を満足させること請け合いだ。だって僕自身がそれに満足したんだから。猊下に見せた際に彼が何と言ってくれたか、君に伝えることとしよう。

君のことを高く評価する我が兄パオロと、君のことについてしばしば語った⁹。

⁶ この手紙は現在残存していない。

⁷ 1514年12月4日付マキアヴェッリ発ヴェットーリ宛書簡。

⁸ ジュリオ・デ・メディチ枢機卿。

⁹ 以下のイタリック体部分はラテン語で執筆されている。

彼は今月中にローマからフィレンツェに戻るだろう。そして君は彼から僕がどれほど君の役に立ちたいと願っているか、君のためにどれほど策をめぐらしているかを知ることができるだろう。だが僕たちが運命のなすがままにされていることを信じてほしい¹⁰。過日僕はポンターノが書いた『運命論』を読んだ。この人物からコンサルポ・ディ・コルドバ大元帥に献呈された、近日に刊行された書だよ¹¹。ポンターノは運命の好意を得なければ、勇気も思慮も剛毅さも、そのほかどんな美德も何の力も発揮できないことを明白に論じている。ここローマではポンターノのこうした議論の実例を、いたるところで見ることができるだろう。実際ここでは、少なからぬ卑賤で無学で無能な連中が多大な権威をほしいままにしているんだ。だからポンターノのこうした意見を全面的に承服せざるを得ない。近日ひどい不運に見舞われ散々な目にあった君は、とりわけ彼の意見に賛同せざるを得ないはずだ。[こうした不運に見舞われても]神がそのうちに僕たちに何らかの埋め合わせをしているだろう¹²。ここで僕は必ずしも体調が良くないまま日々を過ごしている。(君も知っての通りの)以前からある首のできものが日ごとに大きくなっていて、それを切開して治療することができるかはなはだ心もとない。僕は教皇様やその他のメディチ家の方々に気に入られているようだが、彼らに対し何事も願い出ることができないままである。フィレンツェの法規定が私に支給する限りの給料を使って現状維持をするのが精いっぱい、月末にはすっからかんになってしまう。恋愛の仇事から身を引き、読書やその他の楽しみに専念する毎日だ。

¹⁰ 先立つ1514年12月3日付ヴェットーリ発マキアヴェッリ書簡、なかんずく「僕は僕自身に対してすら役に立たない存在なんだから、たとえ君の役に立ってあげられなくても、驚きたもうなということだよ」という行を参照。

¹¹ ポンターノの『運命論』(De Fortuna)は1512年にナポリで刊行されている。そこにおいてポンターノは、ルネサンス期人文主義特有の自然学的・占星術的観点から、人間の徳性と運命の葛藤について論じている。ヴェットーリによる続く行文は、その第一巻冒頭の論旨の、簡潔な要約である。

¹² ヴェルギリウス『アエネイアス』I, 198-199 参照。

ドナートの件はロレンツォ閣下をお願いしておいたよ¹³。君もドナートも私がそのことを忘れていたなんて思わないでほしいよ。閣下は僕に、いまのところ誰も当該の官職に登用されてはいないし、閣下がフィレンツェに帰還されたならば、ドナートをその職に登用すると約束してくれた。実際今のところ当該の職に実際着任した者も任用予定の者もない。だが君とドナートは、かの我々の友人¹⁴に何らかの約束事をするようにと、僕をけしかけてくる。いいかい、彼はたとえそれに如何なる汗も流さなかった場合でも、ことが成った暁には、何が何でも利益をせしめようとする御仁だけ。確かに彼は推薦状を書いたかもしれない。だがそれは彼にそれを書くよう、僕が頼んだからに過ぎない。僕はロレンツォ閣下に対して、(この件につき)僕ができる限りの熱意を以て言上してきた。だがかの友人は100ドゥカートの場合についての、ピエロ・デル・ベネ宛の手紙を私が持っていることを知っている。なぜなら私がこの件がうまく進むよう彼にその手紙を見せたからだ。だから彼はこの100ドゥカートを裏書きした手紙の有効期間が6か月しかなく、その期限が間近に迫っていることも知っている訳だ。最悪の事態を想定するならば、僕は彼がこの件を妨害するために、いろいろと介入してくることを望んではない。君たちだってそれがこの御仁にとりいかに容易なことかよく知っているだろう。だからもしドナートが(手紙の失効期限を延長するため)ドナート宛の手紙を書きなおそうとするのであれば、その可否は彼に任せることとしたい。そしてかの御仁には、事がうまく運ばない限り、彼はその金に少しも触れることはできないのだということを、思い知らせてやることにしよう。そのうえでもしそのことが僕たちに可能ならば、彼に支払うべき金額を値切ってやろう。だが君がやはり、この御仁が我々の一件を妨げることを無いためにしたいと思うのなら、ごく最近に彼が僕にそれを示唆したように、100ドゥカートの払い込みを保証するベネ宛の手紙を彼に提示することができなくてはならないだろう。君にとって最悪の事態だったのは、僕が適切な時期にそれを落掌できていなかったということだ。君はまだ何

¹³ 1513年8月25日付マキアヴェッリ発ヴェットーリ宛書簡及び1513年12月19日付マキアヴェッリ発ヴェットーリ宛書簡参照。

¹⁴ レオ10世の祐筆ピエロ・アルティンゲッリのこと。

か手を打てたかもしれないが、こうとなつては成否を運に任せるしかあるまい。あなたのご家族とまた他のマキアヴェッリー門の方々によろしくということ以外、なにも付け加えることはない。キリストがあなたのご一家を守ってくださいますように。

フランチェスコ・ヴェットーリ ローマ駐劄大使

【39】

フィレンツェなる威名赫々たる士 ニッコロ・マキアヴェッリへ
1514年12月30日

さあ凶暴な情熱が俺に再び戦いを挑んできたぞ
友よさあ俺は懲りもせず再び、新たな炎により苦しめられる破目になった¹⁵

オヴィディウスがみごとに言い当てたように、愛というものは実に閑暇から生じるものだ。僕は他にすることもないから、かつてミーノ・ダ・シエナがそうした事例に倣い、専らこのことばかりに心を向けようと思う¹⁶。だから私が本来そうあるべき様に、君に返事を書くことはしないつもりだ。君に呈した疑問に関する君から受け取った二通の手紙は、既に教皇様とビッビエンナ及びメディチの両枢機卿にお目にかけて¹⁷。皆様全てが君の才華に驚嘆され、君の判断

¹⁵ イタリアック部分はラテン語。オヴィディウス『愛の治療』からの引用(*Remedia amoris*, vv.136-137)。

¹⁶ ガエタに従う伝統的注釈では、この個所はシエナ人ゼッパ・ディ・ミーノを主人公とする、『デカメロン』VIII, 8に言及したものとされてきたが、イングレーゼはむしろ、サケッティ『ルネサンス巷談集』第84話のミーノ・ダ・シエナの逸話を示唆するものではないかという。

¹⁷ 1514年12月3日或いは14日付マキアヴェッリ発ヴェットーリ宛書簡及び1514年12月20日付マキアヴェッリ発ヴェットーリ宛書簡。ビッビエンナ枢機卿とはすなわち、ベルナルド・ドヴィーツィ(1479-1520)のこと。ジョバンニ・デ・メディチ枢機卿の秘書だったが、彼のレオ10世としての教皇即位とともに、1513年9月23日ジュリアーノ・デ・メディチとともに枢機卿に叙任された。

力を称賛されていた。僕は友人を助けてあげる術を心得ない粗忽者だから、残念なことにはまだ彼らから、単に言葉以外の何かの約束を取り付けてあげることができないでいる。とはいえこうした貴頭の方々に良く思われたということは、君にとり決して悪いことじゃあないだろう。閑暇を消化するために、そしてまた君に物を書くための材料を提供すべく、君の手紙を読んだ結果、そこでの君の判断のいくつかに反論したい部分も無い訳でもなかった。だがいま僕は先にふれたように、自分の恋愛に夢中になっているから、書き始めた君宛の書き物も脇にほったらかしにしている。別の機会にこれは仕上げることにして、仕上がったらそれを君に送ることとしよう。

僕が飛脚に託して君に送った靴下の生地を君が落掌したか、僕はまだ知らない。僕は飛脚にそれを博労のシモンの奴のところに置いておくよう言いつける一方、フィリッポ・デル・ベニーノにこのことを君に伝えるよう頼んでおいたんだが。だが彼は連絡一つよこしてこない。君がそれを受け取ったかどうか心配だ。どうかそれを探し出してくれたまえ。だってこの何百年来、君からの頼みごとに誠実に答えないなんて、僕にとってはありえないことなんだから。

ピエロの要望書と一緒に、ドナートの一件についての君の手紙も、ベニーノ宛のドナートの手紙も僕は既に落掌しているよ。彼には、フィレンツェに帰った時ロレンツォ閣下が彼を登用すると約束したから、それは実現するに違いないと言っておいてやってくれないか。閣下がこの約束を守るかどうかは、実際になってみなくちゃわからない。ともあれ閣下は僕にそう約束したんだ。だから彼がフィレンツェに出発する前、彼にそのことを思い出させつもりでいる。君も知るとおり一そしてそのことを君はドナートにも立証してくれると思うが一僕は、彼が実際約束しなかったなら、そんなことを言ったりはしない人間だ。僕は友人たちの胸を、空約束の希望で膨らませるようなことはしたくない。かの友人に支払う金銭についてもできる限りの配慮をしよう。なぜなら彼が本件につき実は何の役にも立たない者だとしても、金が手に入らないと知るや、彼はこの件をぶち壊そうとしかねないからだ。ともあれ僕は彼のことを、私が適切と見る何らかのやり方で、味方に引き付けておくつもりでいる。この件についてはもう他に言うことはない。キリストが君をお守りくださいます

ように。

フランシスクス・ヴィクトリウス ローマ駐劄大使

【40】

フィレンツェなる威名赫々たる士 ニッコロ・マキアヴェッリへ

1515年1月16日

我が友よ。君からの手紙に増して私が喜びを以てそれを読む手紙を、僕は誰からも受け取ることがないほどだよ。手紙に書くことをはばかれるような僕が知り得た色々なことを、君への手紙に書くことができればどんなに楽しいだろうかと思う。この何か月もの間の手紙のやり取りを通じて僕は、君がどれほどの愛の激情に囚われているのかよく分かったよ。だからあえて君にこう言ったのさ。「コリドンよコリドンよ、どれ程の物狂おしさにお前は捕らえられたことか」¹⁸。あげくに僕は自身の心中でこうも思った。この世界の大半を占めているのは愛であり、それはもっとあからさまに言わせてもらえば欲情なのだ。このことを僕は肝に銘じているよ。この点について人は口にすることと、心の中で信じていることに、どれほど表裏があることかとすら僕は思い始めている。一人の父親がいて、彼は自分の息子をまっとう正直に養おうと思っていると言募っている。だがこうした父親はこの子に四六時中彼と一緒にいる家庭教師を宛がう訳だが、この家庭教師ときたらこの子を自分のやり方で教える権限を与えられているのに、古の人が目を剥くようなとんでもないものをこの子に読ませてはばからない。母親は彼が彼女に一段と好ましい者となるよう彼のことを洗い立て、彼におめかしをさせる。この子が大きくなるや、親は彼に一階の部屋を与えるが、そこは往来に直接面していたり、そのほか彼が気ままに暮らし、そこに望みのまま誰かれなく引っ張り込むための、ありとあらゆる便宜が

¹⁸ イタリアック部の原文はラテン語。ヴェルギリウス『牧歌』(Eclogus)II, 69からの引用。

備わった部屋だ。僕たちは誰もかれもがこんな風になっている。それも傍目から見てちゃんとした人のように見える人ほど、間違っただけをしているんだ。だから今どきの若者がめっぽう色好みであることも、別に驚くにはあたらない。なぜならこんな風潮は、まったくもって昨今の言語道断な躰に由来することだからさ。君と僕はもう年寄りだけれど、こうした若僧たちの影響をなにがしか蒙っている。それはもうどうしようもないことだよ。そっちに行けないのが残念だ。そっちにいれば僕たちは一緒にこうしたことや、他のあれこれの事柄について話すことができたろうさ。

君は僕に対して君がリッチャからの信頼と同情を取り戻したと、実に嬉しいことを知らせてくれた¹⁹。その結果として君に誓って言うが、以前の僕は君に対する愛情ゆえに彼女に対して好意的であったが、いまや [こうした彼女の人の良さのゆえに] 彼女の魅力の虜になってしまっている。たいていの場合女は男よりも運命を頼りにするものだ。従って運命が変化すれば彼女らの心情も変化するものなんだよ。ドナートのことについても、僕は驚いたりはない。というのも彼は誠実な男だし、それに加えて彼も君と同じような経験を、何度も味わっているからさ。

僕は以前君に、持て余した暇が私を恋に陥らせたと言ったが、今でもそうだ²⁰。なぜなら他にすることが何もないんだよ。年をとって老眼になったせいで、もうたくさんものを読むことができない。誰かに連れられてでなければ、公の祝い事の場に出かける気にもなれないし、こんな祝い事がいつもあるものじゃない。こうした社交をしてもらうのに必要な、権威も金も僕にはないんだ。だからと言って物思いにふければ、それは僕が一番嫌っている憂鬱症へと僕を引きずり込んでしまう。だから努めて楽しいことだけを考えようとする訳だが、閨房のこと以上に考えたり、ましてやしたりすることで楽しいことを僕は知らない。道学者ぶりたい奴はいくらでもそうするが良いよ。だがこれこそは、多数の人が良く心得ていながら極少数の人しか口にしない真理なのさ。春には恐

¹⁹ この手紙は今日残存していない。リッチャはマキアヴェッリが昵懇にした娼婦。

²⁰ 前掲 1514 年 12 月 30 日付マキアヴェッリ発ヴェットーリ宛書簡参照。

らく君を訪れることができるだろう。だからその時にこのことやその他のことについて、一緒に話すことにしよう。フィリッポ²¹、ジョバンニそしてロレンツォ・マキアヴェッリに²²、またドナート²³にもよろしく伝えてほしい。キリストが君をお守りくださいますように。

フランチェスコ・ヴェットーリ　ローマ駐箚大使

(金沢大学人間社会研究域歴史言語文化学系)

²¹ ガエタの注釈によればフィリッポ・カサヴェッキア、イングレーゼの注釈によればフィリッポ・マキアヴェッリのこととする。

²² ガエタの注釈によればアレッサンドロ・マキアヴェッリの子ニコロの子である、ロレンツォ・マキアヴェッリ（1539年没）。他方ネジェミーはマキアヴェッリ家の他の支脈のニコロ・マキアヴェッリの子ロレンツォのこととする。この人物はヴェットーリの叔母の一人と結婚しているようである。

²³ ガエタの注釈によれば、ドナート・デル・コルノのこととする。

F. Vettori's Letters to Machiavelli (3 December 1514 - 16 January 1515): Translation and Notes

Morihisa ISHIGURO

Summary

This work translates four letters (dated 3 December 1514, 15 December 1514, 30 December 1514, and 16 January 1515), which were written by Francesco Vettori, a wealthy Florentine noble and politician, and a friend of Niccolò Machiavelli. These four letters as well as five responses to them made by Machiavelli are part of a historically valuable collection of some forty-one letters exchanged between the two friends.

The letters show that, over a number of months, Machiavelli appealed to Vettori to help him to rehabilitate himself within official Florentine circles. In response, Vettori appeared to be reluctant to help by stating that he did not have sufficient power and influence to fulfill Machiavelli's wish. Nonetheless, the nine letters show that Vettori in fact tried, somewhat hesitantly, to assist his friend by introducing him to leading members of the powerful Medici family.

In particular, Machiavelli's newfound acquaintance with Cardinal Giulio de Medici (later Pope Clement VII) proved to be one of the most important developments of his later life. It was a crucial factor in helping the Florentine to turn his life around. As a result of winning the Cardinal's favor, Machiavelli was nominated to write the official "Florentine Histories". The Italian philosopher also played a central role as provisor and chancellor in a new magistracy to oversee the renewal of Florence's walls and fortifications. These important positions illustrated Machiavelli's successful return to official life in the city. The translation of the letters in this work contributes to a better understanding of the peaks and troughs of Machiavelli's life.